

平和で豊かな沖縄県を目指す情報誌

無料

ご自由にお持ち
帰り下さい

沖縄協会だより

2023.1

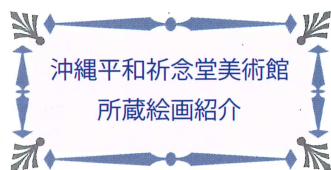
No.26



秋元清弘 作

うるわしき八重山ー石垣島

号数：F100



秋元清弘 大正11年 東京都生

画歴

東京美術学校油絵科卒、森田茂に師事。東光会奨励賞、日展特選。日展審査員、日展評議員、東光会副理事長・常任審査員。平成7年没。

制作意図

八重山の大自然。人影も人家も全く視覚に入らない。真の青に澄んだ空、エメラルドの宝石の海。その自然の中に埋没してしまった作者。時の流れが静止したかのような島の表情に、より明るい太陽が照りつける。やさしく問いかける島の自然、この自然をいつまでも大切にしたい。(昭和57年1月14日寄贈)

額サイズ

縦×横×厚【155×188×9cm】

沖縄協会は、沖縄が本土に復帰するまでの間、各種の援護活動を行った特殊法人南方同胞援護会(昭和31年～47年5月)の後を受けて、昭和47年9月20日に設置された内閣府所管の公益法人です。新たに設立した財団法人沖縄協会は、南方同胞援護会の実績と経験を活用して、沖縄の振興施策に積極的に協力し、平和で豊かな沖縄県の建設に寄与してまいりました。平成23年(2011)4月1日、沖縄協会は内閣総理大臣より公益財団法人として認定を受けて「公益財団法人沖縄協会」として新たな一歩を踏み出しました。これからも、沖縄県の健全な発展と幸福な社会形成に役立つ事業を行いながら、沖縄平和祈念堂を管理運営することで、平和で豊かな沖縄県の建設に貢献していきます。

公益財団法人 沖縄協会

第44回

沖縄研究奨励賞受賞者決定

自然科学部門



玉城 磨
(たまき・まろ)

〈研究題目〉
沖縄農業の台風対策に関する研究

〈年齢〉
49歳
〈所属〉
沖縄県農業研究センター
上席主任研究員



井口 亮
(いぐち・あきら)

〈研究題目〉
造礁サンゴ類の環境応答に関する総合的研究

〈年齢〉
44歳
〈所属〉
産業技術総合研究所
主任研究員

人文科学部門



照屋 理
(てるや・まこと)

〈研究題目〉
琉球文化圏における口承あるいは筆録の文芸・文化研究

〈年齢〉
47歳
〈所属〉
名城大学国際学群
上級准教授

沖縄協会では、沖縄の地域振興、学術振興に貢献する人材を発掘し、育成するため、昭和54年（1979年）から沖縄研究奨励賞を設け、沖縄を対象とした将来性豊かな優れた研究（自然科学・人文科学・社会科学）を行っている50才以下の新進研究者又はグループに対し、その年ごとに3件以内に贈呈している。本年度で第44回を重ね、全国6都府県から18件の推薦応募が寄せられ、選考委員会（牧野浩隆委員長）において、厳正・慎重な選考を重ねた結果、受賞を3件に決定した。

※年齢は2022年7月15日応募時

沖縄農業の台風対策に関する研究

玉城 磨

受賞理由

本土復帰当時、沖縄は天然の温室という発想で振興が試みられたが、沖縄の激しい気候変動対策が力ギとなっていた。

沖縄の気象条件を10年単位で平均化してみると、農業に対し好適な条件に思われがちであるが、年単位の気象変動は極端に変化し、それに耐えられるサトウキビやパイナップルが主幹作物の役割を担ってきた。

その限界を打破するためには、高付加価値の園芸作物の振興に尽きるが、冬季の花弁や野菜は、簡易な施設の応用で、それなりに発展してきたが、施設の高度利用の完成度を更に高める必要が残されていた。

すなわち、台風被害が殆んど発生しない周年型のプラスチックハウスの完成である。これが実用化されると、マンゴー、パパイヤ、ドラゴンフルーツ等々の夏場に出荷される多年性作物の安定生産と高付加価値化と農家の労働配分を根本から解決する大きなメリットがある。

本研究は、2003年の台風14号（最大瞬間風速74.1m）による

被害を分析し、コンクリート基礎、ベースプレート、各種の接合ボルト、溶接部の破断等の多岐にわたる解決策を提示し、ネットの併用で最大瞬間風速50mに耐える実用的なハウスを完成したことである。

更に重要なことは低コスト化である。20〜30年以上のスペンを考えると、H型鋼材の活用であるが、初期投資に難題がある。

本研究の成果の応用は、コストと強度を同時に解決しており、農家にとっても取り組み易いレベルに達している。気がついてみると、沖縄の大半のハウスが周年張に変わってきており、ハウスのメンテナンスや栽培技術も着々と向上しており、本研究は沖縄農業の可能性を現実化しつつあり、素晴らしい実用技術である。

【比嘉照夫・選考委員】

造礁サンゴ類の環境応答に関する総合的研究

井口 亮

受賞理由

熱帯・亜熱帯の浅海域に特徴的なサンゴ礁は、地球上で生物多様性のもっとも高い生態系が形成されている場のひとつであ

る。このサンゴ礁の基盤を形作る造礁サンゴ類は環境変化に非常に鋭敏で、現在、世界的に注目されている地球温暖化やCO₂濃度の高まりによる海洋酸性化の影響により、その減少が危惧されている。

井口亮氏はこの問題に強い関心を持ち、造礁サンゴ類の環境応答に関する研究を精力的に行っており、多くの成果をあげてきた。研究の視野は、造礁サンゴ類への高温化の影響や、CO₂濃度の高まりによる海洋酸性化の影響から、都市や農地からの栄養負荷の影響など、広い範囲に及んでいる。また、研究方法においても、飼育下における環境要因変化への反応実験、環境変化への耐性メカニズムについての分子生物学的分析、諸地域から得られた標本解析による遺伝的集団構造解析など、多様なアプローチが積極的に活用されている。とくに注目されるのは、環境要因を厳密に制御した飼育実験系を自ら確立し、サンゴ類の環境応答の諸側面を詳細に把握することとに成功したことであり、海洋酸性化がサンゴ類の石灰化や光合成活性を低下させること、あるいは受精率を低下させることなどを明らかにしている。研究成果は数多くの論文として公表され、高く評価されている。

以上のような井口氏の成果は、

出身地である沖縄の研究機関で研究を積んだ同氏のサンゴ礁に関する深い関心に基づいており、学術面での貢献に加え、観光業などの面から沖縄にとって重要なサンゴ礁の保全方策を考えるうえでも貴重な情報を提供することを通じて、地域振興にも貢献するものである。井口氏の今後のいっそうの研究推進と活躍が期待される。

【西田 睦 選考委員】

琉球文化圏における 口承あるいは筆録の 文芸文化研究

照屋 理

受賞理由

照屋理氏は、『おもろさうし』を中心に琉球文学の研究を展開してきた新進の研究者である。

氏の研究は、文献研究とこれを裏付けるフィールド調査を両輪としているが、これが効果的になされ、大きな成果を挙げている。今回提出された『『おもろさうし』の他界観と寄り物伝承—名護におけるイルカに関する伝承を中心に—』は、「名護の首長の人徳が勝れ、善政が行われると、名護湾にはヒートウ（イルカ）が多数寄ってくるが、その逆だとヒートウは寄ってこない」という伝承を

起点にした論文である。氏は沖縄各地の同類の伝承を調査し、それがイギリスの社会人類学者ジームズ・フレイザーの「殺され王」の概念につながるものであると同時に、この名護のイルカタイプの話が日本本土にはみられない珍しい事例であることを指摘している。さらに、この類型が『おもろさうし』の地域支配者および東アジアの領主的存在と「世」（社会）とのパラダイムを内包するものである可能性も論じており、問題を空間軸・時間軸両面から論じた勝れた論文になっている。構成的にやや難のある部分もあるが、今後の発展を期待させる論考である。

氏は現在名桜大学で取り組まれている「琉球文学大系」編集刊行委員会副委員長として、大きな役割を果たしている。今後の琉球文学研究を担う若手随一の研究者であり、沖縄研究奨励賞を受賞するに相応しい人物と評価される。

【波照間 永吉 選考委員】



第1回沖縄研究奨励賞 贈呈式の様子

【月刊沖縄第83号（昭和55年2月10日発行）より抜粋】

沖縄の地域振興の基礎となる人材の発掘をめざし、沖縄協会が本年度から設置した第1回沖縄研究奨励賞は、昨年昭和54年12月18日「琉球諸方言の研究」で上村幸雄氏、琉球大学法文学部教授と「沖縄県に分布する特殊土壌に関する研究」で大城喜信氏、沖縄県農業試験場化学部土壌保全研究室長に決定し、1月25日午前11時から那覇市の自

沖縄研究に新たな役割

第1回沖縄研究奨励賞贈呈式



治会館大会議室で贈呈式が行われた。式には、受賞者夫妻をはじめ、沖縄県教育、研究、行政機関の関係者が出席、茅誠司沖縄協会会長より上村、大城両氏に賞状、記念品、副賞として研究助成金が贈られた。会場では奨励賞が今後の沖縄発展のきつかけとなることを期待する声が多く、沖縄研究の新たな役割として注目された。

★沖縄平和祈念堂改修工事に 伴うご寄付のお願い

開堂から45年を迎えた沖縄平和祈念堂では、現在、経年劣化による改修工事を頻繁に実施しております。今後、さらに工事の必要が考えられますので、多くの皆様に諸経費に対するご寄付を賜りますようお願い申し上げます。ご連絡いただきましたら、ゆうちや銀行専用振込票を送付させていただきます。

公益財団法人 沖縄協会

【電話番号: 03-6231-1433】
【FAX: 03-6231-1436】



感染防止対策 徹底宣言



沖縄平和祈念堂

新型コロナウイルス感染症感染防止対策チェックシートを実施し、「感染防止徹底対策宣言ステッカー」を取得しています。



沖縄県

★沖縄平和祈念像「浄め」

12月21日、当協会は恒例の沖縄平和祈念像「浄め」を行った。この浄めは、年末年始にかけて開催する「摩文仁・火と鐘のまつり」と新年を迎えるにあたり行われるもの。今回は、今般のコロナ禍を考慮しながら、2年半ぶりに沖縄バス・東陽バスのバスガイド、沖縄県工芸振興センター研修生・職員の皆さんも参加した。そして、平和祈念像制作者の一人で、浦添市美術館館長の糸数政次さん、当協会職員とあわせて18人で作業を行った。糸数さんには、作業とあわせて祈念像上部の表面に塗られた漆の状態も確認してもらった。参加者は高さ約12メートル・横幅約8メートルの祈念像の埃を払い、丁寧に拭き上げ浄めた。また、各種団体から奉納された折り鶴や平和宣言などの整理を行った。



★第45回「摩文仁・火と鐘のまつり」

12月31日、第45回「摩文仁・火と鐘のまつり」を開催した。この行事は1978年の平和祈念堂開堂の年より実施しているが、43・44回ともコロナ禍により中止にしたため、3年ぶりに関係者約150人限定して実施した。まつりは、本来ならば大晦日より新年を迎えてから終えているが、参加者の安全とコロナウィルスの感染防止を考慮し、規模を縮小して夕方から



開催した。参加者は去りゆく年に思いを馳せ、新年が真の平和になるようにと祈りのたいまつを掲げて行進し、その灯りで幾つもの円陣を描いた。そして、波名城律子さんの清らかな祈りの歌・沖縄平和祈念像讃歌の献唱が終えると平和の鐘が鳴り響き、同時に代表7人が円陣中央の聖火台に平和の火を灯し、勢いよく祈りの炎が燃え上がった。

★第31回金城芳子基金募集案内

【金城芳子基金】は、沖縄女性の地位向上のために献身された金城芳子さん（1902-1991）の強い意志により、そのご遺族によつて1992年に当協会に設置され、沖縄女性のため、社会的に意義のある活動や調査研究を行う個人及び団体グループに助成している。

第30回までに30の個人・団体に助成を実施した。第31回の応募締切は2023年3月31日。当日消印有効。

★第13回琉球大学家政学科同窓会基金募集案内

生活に関する調査研究および社会活動に対し助成金の交付を行い、地域の生活文化の発展に寄与することを目的に設立された琉球大学家政学科同窓会基金の募集が2023年1月10日から開始された。

第13回の応募締切は2023年3月31日。当日消印有効。

※詳細は「公益財団法人沖縄協会のホームページより



沖縄平和祈念堂美術館

沖縄を描く：沖縄をモチーフにした作品 1

守礼の門 野見山暁治 作

野見山暁治 大正10年 福岡県生

画歴

東京美術学校油絵科卒。フランス留学、東京芸術大学教授を経て、同名誉教授。安井賞、毎日芸術賞、芸術選奨文部大臣賞など受賞。2000年に文化功労者に選ばれた。

制作意図

昭和15年の首里の姿。あまりの色の強さに戸惑った。ものの陰は深く静まりかえっていて、描いている間ほとんど人に会わなかった。

号数 F8

額サイズ 縦×横×厚【57×64×5 cm】

